

環境の根本的 改善が不可欠



樹木医 塩原 貴浩さん (37)

樹木はわれわれ人間の寿命よりも、はるかに長い年月を過ごしており、年輪の一本一本にその年の気候変化や天災の記録を刻み込んでいる。これらの樹木を保存し、後世に伝えていくことの意義は生態学的な意味だけではなく、遺伝学的、文化的な面でも大きな意味を持っていると思う。

天然記念物に匹敵する巨樹・古木は、病虫害や風雪を耐え抜く優れた遺伝子を保有していると考えられる。長年、地域を見守ってきた樹木は地域のシンボルでもあり、心のよりどころとなっている。ご神木として信仰対象となったり、農耕の目安となるなど生活と密着している木もある。

杉は元来、高温乾燥にとっても弱い樹種。年間降水量が1500^{mm}以上の地域が生育適地

である。天然記念物である安中の杉並木は大きさや文化的な歴史からみても、存在意義があり、安易に幼木と置き換えれば済むというものではない。

一時的な肥料散布だけに頼るのではなく、根本的な環境改善が必要となる。舗装を透水性にしたり、併せて土壌環境の改善を図ることが最善策だと思う。

樹木の住めない環境では人は住めない。杉並木の保存を本腰を入れて取り組まなければ、さらなる樹勢の衰退、倒木の危険が増すと思われる。

しおばら・たかひろ 前橋市出身。東京農大大学院修了。京都の「植藤造園」で修業。2003年、28歳で樹木医に。万葉園グリーンサービス経営。第20期(2011年度)委員。